

1-2

特集 皮膚とこころ

Part1: バーチャル症例で学ぶ皮膚の心身医学
ニキビ

野村有子

野村皮膚科医院 院長

ニキビ患者のこころの闇は相当深い。患者のニキビに対する思いとバックグラウンドを把握し、寄り添った気持ちで診療を行うことが重要である。患者への質問の仕方、話かける言葉や指導内容について、2例を提示して説明する。10代のニキビのストレスで心を閉ざしてしまった例と、30代の多忙でいろいろ治療をしているがうまくいっていない例である。丁寧な診察には時間がかかるが、看護師の協力のもとで、決してあきらめない気持ちで診療に取り組んでいくことが大切である。

はじめに

ニキビ患者のこころの闇は相当深い。皮膚疾患患者の Skindex-16 を用いた QOL 評価¹⁾ においても、他の炎症性皮膚疾患に比べて症状スコアは軽いものの、感情面でのスコアは高く、患者の気持ちに寄り添った診療が求められている。

患者に寄り添うには

ニキビに対する思いを把握する

たった1つのニキビがあっただけでも外出できなくなってしまった例や、重症のニキビだが少し改善しただけで大喜びする例など、患者一人ひとりのニキビに対する思いはまったく異なっている。ニキビの重症度だけではなく、患者がニキビに対して、どの程度どのような点が気になっているのかを、具体的にしっかり把握する必要がある。



図1 症例1: 10代女性

ニキビができているバックグラウンドを把握する

長年ニキビを患っていたり、仕事や化粧、生活習慣などでニキビを悪化させる要因が避けられなかったり、患者にはそれぞれのバックグラウンドがある。このバックグラウンドをきちんと把握したうえで、対処するための工夫が必要となる。

患者のニキビ物語

患者が診察室に入ってきた瞬間から、診察は始まる。患者にはそれぞれ異なったニキビ物語²⁾がある。常に初心=初診の気持ちを忘れずに、「ニキビができていますね。どうして治らないのか一緒に考えながら、治療を進めてみませんか?」と一言告げてから、ニキビ物語の把握に努める。多少時間を要するが、ニキビを治すためには大切な過程である。

それでは、これからニキビ物語のスタート!である。

バーチャル症例

症例1: 10代女性

診察室に入ってきた瞬間から、下を向いたまま顔を上げようとしな。髪で顔を隠し、深く帽子をかぶっており、なかなか話したがらない(図1)。問診票には、顔に○印がつけられ、「ニキビ」と一言だけ書いてある。

丁寧なやさしい診察

「どうされましたか?」

「……」

少し間をとりながら、患者の様子を観察する。きっと外出もしたくないに違いない、やっとの思いで当院まで足を運んでくれたのだ、と考える。焦らないでじっくり腰を据